週刊ダイヤモンド　今週の一冊

北村行伸

平成 17 年 12月 19 日号

「＜現代家族＞の誕生：幻想系家族論の死」

岩村暢子（著）
勁草書房　2005年6月27日刊

本書は、昨年5月に本欄で取り上げた『変わる家族　変わる食卓』を書いた岩村暢子氏による現代家族を知るための「実証考察学」の第2弾である。前書は1960年以後生まれの151世帯の主婦が提供する一日3食の食事の詳細な記録をとり、日本の家庭の食卓が崩壊しつつあることを明らかにしたものであったが、本書では、どうしてそのような崩壊が起こったのかを、前書に登場した主婦達の実母40人にインタビューすることで検証したものである。

著者の分析手法は、観念的な（著者によれば幻想系）家庭生活観を客観的な事実確認によって論駁していくというユニークなものである。

著者が発見した事実は、(1) いま食を崩し始めている現代主婦の母親達は戦中・戦後の食糧難時代に成長期を過ごし、昔ながらの家庭の食を食べることが出来ずに育った世代であったこと。(2) この世代は戦前・戦後の価値観の転換や高度成長で次々に新しい電化製品や便利な加工食品が登場したこと、テレビや雑誌を通した情報で新しいライフスタイルを取り入れていったことなどを通して、固定的なスタイルを守るというより、常に新しいスタイルに追いついていくべきだということを実体験した世代であること。(3) この世代は高度成長期の日本経済の恩恵を最も受けており、十分に子供に資金や時間をかけて育てていること。また、自分たちの戦中・戦後の苦労を子供達にはかけたくないという意識や自由放任主義志向も強かったことである。

このような事実を前に、著者は「今日浮上しつつある深刻な家族問題や奇妙な社会現象のいくつかは、このような家族の歴史の上に、今ようやく顕在化し始めたことのように思えてならない」と結んでいる。

社会経済の構造は短期的で表層的な政策や一過的な流行によってもたらされるものではなく、世代を超えて無意識のうちに、しかも社会全体が一定の方向性をもって変わっていくものである。評者は現代の家族問題に端を発する社会問題の解決は容易ではないということを、本書を読むことで実感した。